

## 一号館前広場デザインコンペ、銀賞に輝く

### 都市デザイン研究室、2チーム応募して入賞

本誌5号でも募集を紹介した工学部一号館前広場デザインコンペにおいて、都市デザイン研究室メンバーの2チームが準優秀賞獲得と入賞を果たした。6月30日応募締め切りの同コンペには15チームが応募し、7月6日の第1次審査で5案に絞られた。当研究室の2チームはいずれもこの第1次審査を突破。7月26日の最終審査においては、柴田直 M1 ほか2名の「WHEREABOUTS」が準優秀賞に輝き、内山隆史 M2・田辺康弘 M2・楊恵亘 M1 チームの「知が騒ぐ」も入賞となった。最優秀賞は新領域創成科学研究科ほかの修士学生4名による「ヒロバ」というよりはどちらかということ「ナカニワ」案。

同コンペは、当選案実現への道すじが担保されておらず賞金も出ない、という条件であったが、一号館前という身近な対象地ゆえに建築・社会基盤・都市工の3専攻から多くの応募があって、大きな盛り上がりを見せた。学科・研究室の意地をかけたぶつかり合いといった様相を呈していた中での両チームの活躍は、設計集団としての都市デザイン研の面目を大いにほどこす快挙であった。

### ◆準優秀賞作 「WHEREABOUTS」

柴田 M1 と建築学専攻修士の学生2名による超学際的コラボレーション。「居場所」づくりをモットーに、銀杏の大木や銅像といったエレメントを残しながら、空間の再編成を試みた。「居場所」を支える仕組みとしての広場メンテナンス・システム等、ソフト面での提案を行った点が他案に差をつけることとなった。



▲最終審査図面

<構成>

- 1 本郷キャンパスにおける広場の位置づけ
- 2 誰もが自分の居場所を見つけられる広場
- 3 残す／切り替える／広げる／繋ぐ
- 4 居場所とリンクする仕組みづくり
- 5 自律しながら保存する風景

### 柴田 M1・コンペを振り返って

①オープンスペースへ介入していく個々の啓発順序の転回：受動性を能動性に。

②「居場所」の設定：あらゆる行為が場所に規定されないように。

と、二重のコンセプトを設定しました。

違う学科の2人で（最終的には3人）の作業だったが、作業は分担してこなしたため、MTごとの進展は大きく、意思決定も早かった。他の案が物理的に場を提案した一方で、システム（よりメンタルでソフトな）を前提とし、それに対応する物理環境を準備したことがうけたのではないのでしょうか。

### ◆入賞作 「知が騒ぐ」

最終審査に残った5案中唯一、「建物」を設計した。地上からのなだらかなスロープが、計算された日光とともに荘厳な地下の講評室へとアプローチしている。スロープには歴代工学部・建築土木系の主だった教授陣の肖像を展示、1号館地下部分にはガラス張りの教授控室を設けるなど、学問・知の可視化と活性化をめざした意欲作である。



▲第一次審査図面

▼平面図



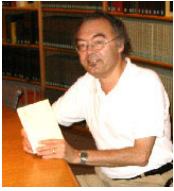
### 田辺 M2・喜びの声

審査員の錚々たる顔ぶれを見て、力だめしにと思って応募。3人でエスキスを持ち寄って議論する過程は楽しかったのですが、みなアイデアを汲もうとして「あれもこれも」式になってしまった面がありました。修士研究発表ジュリーと見事に重なってしまった最終プレゼンがもう一歩でしたけど、コンペ自体は「研究室対抗運動会」のような和気あいあいムードで楽しかったですね。

模型作成に余念ない  
田辺・内山 M2  
(最終審査前夜)



## オギュスタン・ベルク教授、12月に都市工学科特別講義



国際的地理学・東洋・日本学者として知られるフランス国立社会科学高等研究院 (EHESS) のオギュスタン・ベルク教授は、今年度1年間、京都の日文研 (国際日本文化研究センター) 外国人研究員として滞在中で、12月5日 (予定) に東大都市工学科で特別講義を行うことになった。



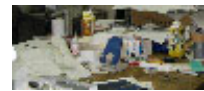
日文研

西村教授が計画を進めているが、この詳細は、追って都市デザイン研マガジンで紹介する。8月3日、酒井研究生が所用で日文研にベルク教授を訪ねたところ、東大側の熱意に感謝し、期待にこたえたいということだった。都市デザイン研究室OBの鳥海基樹首都大学東京専任講師は、ベルク教授のもとでEHESS博士課程を2001年に修了して博士 (都市学) になった。

去る5月13日に東大弥生講堂で開かれた日本造園学会80周年記念国際シンポジウムでは、ベルク教授の講演と西村教授の話題提供報告が行われ、閉会後ベルク教授は、NPO法人粋なまちづくり倶楽部メンバーの案内で、神楽坂のまちづくりを視察し、その後西村教授とも歓談した。

風土、風景に関心の強いベルク教授は、『都市美』もすでに読み終え、日文研蔵書の都市美運動家・椽内吉胤著『日本都市風景』(復刻版) を読み始めた瞬間を、本誌担当の酒井研究生のカメラに収まった。

## ●2005年夏学期、留学生たちの活躍



研究室の留学生たち、この夏学期は積極的に海外の学会で研究発表を行いました。5月初めにクリスD4が母国ドイツ・ハノーファーで開催された“Hybrid Spaces Workshop”で日本の民間開発における公共空間創出について凱旋発表したのに続いて、6月初めにはニラモンD3が“World Tourism Organization Ulysses Conference 2005” (マドリッド) で、韓D1が“The 10th Inter-University Seminar on Asian Megacities” (ハバロフスク) で、各々、研究成果を発表しました。研究室大机もお土産で大にぎわいでした (上写真)。

そして、先月29日にはニラモンの博士論文審査会が開催されました。学位請求論文のタイトルは…… “A Study of Stakeholder Collaboration and Locally-Based Tourism Development” 母国タイの3つの集落での地域型観光開発を事例に取り上げ、利害関係者間の協働の様態とその効果を分析しました。修士論文ではバンコクのバックパッカーについて研究したので、結局日本での5年間、観光と地域づくりとの関係について考え抜いたわけです。質疑応答も無事切り抜けました。9月にはニラモン工学博士の誕生です。

ところで、ベトナムからの留学生チー (M1) は、7月末から8月初めにかけて「第18回 JAPAN TENT—世界留学生交流・いしかわ2005—」に参加。お祭りへ参加したり、座禅を体験したり、日本の伝統行事を存分に楽しんできたとのこと。座禅姿の瞑想チーさん、地元の新聞にも写真入りで大きく報道されました。

### 本だな



西村幸夫編著『都市美』、朝日新聞7月24日付に松原隆一郎東大教授書評

厳密な論考の集積でありながら、出版したいに極めて戦略的な意図が込められている。財産権や個人主義、自由主義といった考え方を産み落とした当の欧米諸国が、それらの概念と両立するよう知恵を絞り規制をかけていく有り様を各国の歴史や地域性に即して詳述。摩天楼が林立した19世紀末のアメリカで、採光とテナントの奪い合いに悲鳴を上げた不動産関係者が高さ規制を望むに至ったという逸話は、今後の日本を考える上でも興味深い。景観法にとって援護射撃となる事例の数々が挙げられている。

### 編集後記

工学部一号館前庭デザインコンペは、7月27日、審査員のひとりである北澤猛大学院教授からの速報が、「本研究室のメンバーから2案が提出され、一つが準優秀賞、一つが入賞と大変健闘しました。おめでとう。詳しくは、ホームページを見てください。http://keikan.t.u-tokyo.ac.jp/1gou/」として研究室のメーリングに流れ、さっそくみながホームページで確認して喜び合いました。まさに設計集団の研究室として面目躍如。ありがとうございます! (酒井)